

# 藤野尚之

【受賞作】ぼろ市のコントラバスを鳴らしけり

第59回全国俳句大会 大会賞



大会賞の賞状。例年であれば授賞式が東京で催されるが、今回は新型コロナウイルス感染症の影響で中止になった。

## FUJINO Naoyuki

1936年12月14日、迫町光ヶ丘東生まれ、84歳。会社を定年後、65歳で俳句結社「かたばみ」(埼玉県大宮市)、その3年後に「きたごち」(仙台市太白区)に入会。現在は、文化・スポーツクラブはさまで月1回開催される俳句教室で講師を務める。趣味は釣り、ゴルフ、囲碁。

「い」つかは大会賞をと思っていましたが、本当にとれる日がくるとは、「継続は力なりです」ね」とほほ笑む藤野さん。

第59回全国俳句大会(俳人協会主催)で1万2520句の応募の中から最高賞となる大会賞に選ばれた。大会を主催する俳人協会は、国内に3つある大きな俳句協会の一つ。俳句の大会で賞をもらうということは、必ずしも自分がいいと思った作品が選ばれるものではない。俳句の先輩からの「賞を狙うなら、たくさん投句しなさい」というアドバイスを受け、同大会には十数年前から20句程度投句してきた。過去には、第53、54、57回大会で大会賞に次ぐ秀逸賞を受賞しており、4度目の受賞で念願の大会賞に輝いた。

受賞作にある「ぼろ市」とは、東京都世田谷区のプロロ市通りで12月と1月に開かれるフリーマーケット。活気あふれるぼろ市の情景を詠んだ。

俳句を始めたのは、20年ほど前。大学時代の友人たちと「我々もそろそろ定年。記念に旅行をしようじゃないか」と話が決まり、男15人でヨーロッパ旅行をしたときのこと。ホテルで相部屋になった2人が何やら「ごそごそ」とやっている。何をしているのか尋ねると「俳句を作っている」といふ。「じゃあ、おれも作ってみるか」と冗談交じりで話したことが俳句との出会い。旅行から帰るとすぐにとある新聞社が募集する俳句欄

に独学の俳句を応募した。3カ月後、新聞に入選の文字。うれしくなって、友人に話すと「これは俳句とは言えないよ」と厳しい言葉を投げられた。俳句とは、五・七・五の十七音から成る定型詩。季節を表す言葉「季語」を含まなければならないというルールがある。確かにそのルールは頭になかった。それでも、季語がない句に季節を感じ、選んでくれた人がいたことに俳句へのさらなる興味が湧いた。友人から自らが通う埼玉県大宮市にある俳句の結社で学ぶことを勧められ、本格的な俳句人生の幕が開いた。

月一回大宮に通うこと3年。俳句の受賞は最初のあれっきりになっていった。上達するために読んだ本に、俳句を教える立場にありながらスランプに陥り、1日10句作ることを自らに課し、1年でスランプを脱出したという俳人の話があった。「これだ」。それからは毎日10句以上の作句が日課になった。居間にノートを置き、昼夜問わず思いついたら書きつづる。俳句が生活に溶け込んだ生活を十数年続け、気付けばノートは112冊を数えていた。

「猫を見ても、太陽を見ても、雲を見ても、みんな俳句の題材。自然と言葉が浮かぶ」と語る藤野さんに、作句の苦労はない。「喜怒哀楽などの感情を込めるといふより、日常を句につづる。自分が感じたことに想像力をプラスすることが大切」と続け

る。作った句は、一度寝かせて後日、推敲。「自分勝手に考えて、直していきいんです。答えがあるものではないから、本当に自由にね」と楽し気に話す。気に入った作品には赤丸をつけ、大会にはその中から厳選したものを応募している。

自分が見て感じたことを句にするのが藤野さんのモットー。想像のみで詠む句は、ありきたりな作品になってしまいがちだ。今まで誰の俳句ともかぶったことがないのが自慢で、独創的な世界観を十七音で表す。「俳句は詠み手によって言語化した情景を、読み手が想像して味わうもの。読み手から、自分が思ってもいない解釈を聞けることも楽しみの一つ。私の句を読んで、面白いと感じてもらえれば最高」と頬を緩める。藤野さんは、「人がご飯を食べて元気になるように、句を詠むと元気になる」と今日もペンを執る。



俳句を書き留めたノートは100冊を超える。